

明治の佐伯三青年 (27)

龍溪・鳴鶴・鶴谷

御手洗 一 而

(賛助会員・川越市小堤)

政府の策略 ②

六月三日、今までの集会条例が補正され、ますます拘束が厳しくなった。報知の上局ではいよいよ政府が動き出したと警戒を深めたが、表立った拘束とは裏腹に、政府は露骨な手段で自由党と改進黨との離反を考えつつあった。

「おい。わが党が三菱から金を貰っていると風評が流れているが、この噂を流したのは一体どこのどいつじゃ」

憤慨するのは尾崎であった。机に向かって執筆中の矢野や藤田も、思わぬ大声でふり返った。

「どこで聞いた」
藤田の声に、
「どこもここもあるものか、もっぱらの噂じゃ」

尾崎の荒々しい声が続く。

「噂にしてもまずいことになった。理論闘争ならともかく、金の話で攻撃するとは政府もきたないことをする」
矢野はとっさにそう思い、翌朝早く大隈邸を訪ねた。矢野が大隈を訪ねる時は、大隈の早朝の散歩の時間帯を組るのが常であった。

「ほうー、珍しく早いなあ、矢野君も歳をとったか」
大隈はこう言って矢野を冷やかした。

「ところで変な噂が流れているがお聞き及びでございませうか」

矢野の間に大隈は大きく頷いた。

「政府の奴もきたない手を打つ」

大隈は庭の草花をじっと見つめながら黙っていた。

「政府の打つ手はわかっているが、自由党を使うところに問題がある」

「ええー」

矢野は自由党と聞いて驚いた様子であった。

「まさか、国事のために手を組まねばと思っている自由党がー」

「その事じゃ。それ程政府は両党の連結が恐いのである

う。自由党がそれを信じるかどうか。政府の思惑を謀略とみるかどうかが問題じゃ。その手にのる奴は誰かのうー

大隈はこう言って再び口を閉ざした。

「自由党との合体は無理としても、国会開設の目的のためには手を組めると思ったのにー」

矢野の本心に大隈は領ずくだけであったが、暫くして口を切った。

「それが本筋というものだが、そこがむつかしい。これはまだ他言無用だが、板垣が自由党を作る時、一緒にやらぬかという話のあったのは事実じゃ。だがわしはまだ野に下ったばかりだし、わが党の面々を見てみる、同じ土佐でも板垣と袂を分った連中が多いであろう。政府はそこを見通して作戦を立てている。ここが正念場じゃ」
大隈は再び口を閉ざした。

帰途、矢野はこの大隈の言葉を噛みしめていた。

「そうか。やはり板垣さんとの話は事実だったのか。それにしても自由党との合体はむつかしいー」

矢野はそう思いながら、あの人この人の顔を思い出し

ていた。改進黨には大隈の副総理格として河野敏謙がいるが、この河野は同じ土佐出身でも板垣とは肌が合わない。肌が合わないどころか、西南の乱ではむしろ敵味方の間柄であった。そして沼間守一。沼間は維新後兵事顧問で土佐に行ったこともあるので、土佐には知己が多いだが河野とよくて、沼間が洋行した時は、この河野の肝入りで政府の世話になったらしい。そして大学組を牛耳る小野梓は、同じ土佐出身でも板垣一派とは派が違う。武断派と学者派との差がある。これでは両党の合体はむつかしい。だが、目的のために提携ぐらいはと矢野は思っていた。しかし、政府はその提携をも恐れて、先制攻撃をしかけていたのである。

そして間もなく、政府の三菱攻撃は、自由党の古沢滋を動かしているという風評が立った。政府は三菱を種にして自由党と改進黨との離反を狙っていた。その矢先が形となって現われるのは七月であった。その前に、自由党は機関紙として自由新聞を発刊する。

矢野や藤田は、改進黨と三菱との関係について、当初は党勢の拡張に対する自由党の嫌がらせで、まさか政府

まで動いているとは思わなかったが、七月十二日、共同運輸会社設立をみて、政府の正体を見る思いがした。この会社の設立は、表面上は農商務卿西郷従道の請願により、百三十万を官給して海軍少将伊藤萬吉を社長として許可した会社であるが、要は政府の後援で三菱会社に対抗させようとしたものである。

これを知った報知の上局は、終日喧々囂々の批難が飛び交った。

「政府の奴とうとう正体を現わしたわい」

「政府が民間会社と争うとは大人気ない」

犬養や箕浦の意見に続いて、尾崎の意見は経済面からその的はずれを突こうとしていた。

「三菱から金を貰わねば成り立たぬ程、われわれは貧乏ではないぞ。奴等の頭はどうかしているのではないか」

矢野は黙って皆の意見を聞いていたが、藤田がこれを制した。

「待て待て。腹も立つが立てれば立てる程政府の思う壺にはまる。今は相手にならぬことじゃ。そのうち振り上げた拳の下ろし場所がなくなる」

兄貴分の藤田は、こう言って犬養や尾崎をなだめた。

「茂吉がいいことを言うぞ。今は相手にならぬことじゃ。わが党も三菱も事実無根であれば痛くも痒くもないわい。いずれそのうち証明できる時が来る。だが、尾崎はうまいことをついでている。わが党が中産階級を母体にしていることが心強い。その手にはのらぬわい。たゞし、この手が駄目なら次の手は何か。その方が肝心じゃ」

矢野は皆の批難を聞きながら、こんな事を考えていた。矢野の考えた通り、売られた喧嘩も知らぬ顔をする方が当を得ていた。それよりも、三菱が勝るか共同運輸会社の方が勝つか、経営手腕を見る方が面白いときめこんでいた。暑さのせいも手伝ってか、事態は暫く小康状態を保っていた。

矢野はこの寸暇を利用して、かねてから考えていた歴史政治小説の執筆にとりかかった。晩春に病を得て読んだギリシャ史からヒントを得たものであるが、その動機については、「龍溪矢野文雄君伝」から借りることにする。

「今民権伸張、憲政樹立の大業は、日本初めての事柄であるから、一般の人心を振ひ起さしむべき歴史も伝記も

小説もない。これが一大欠点である。由来、東洋には過去数千年、これらの運動が曾てなかつた為に、日本国民は、未だ立憲運動なるものを知らぬ。故にこの際、どうしてもかの王政維新に於ける「日本外史」「太平記」にも比ぶべき一書を国人に与えて、一般の奮起を促さなくてはならぬ。それには、生硬な論文めいたものよりも、寧ろ「太平記」流に小説体に事を叙して、まづ読者を興味のうちに引入れることが上策である」

そして、もともと病弱な矢野は、疲れを覚えると、筆記のために佐藤蔵太郎に応援を求めた。その様子は、再び資料保存のためにも「佐藤鶴谷自叙伝」を引用することにする。

「それより中二階なる先生の居室の中央、灯光燦然たる下に一脚の浄案を据え、先生は案を背にして正座せられ鶴谷は案に対して坐し、記草を始む。先生、扇子を笏に執りて、宛も講談師然たる恰好して文言を演べられ、鶴谷筆を走らせて是れを記す。一句毎に、先生、書いたかヨイカと問ふ。鶴谷悪筆なれども筆記は達者なり、先生ヨイカと問ふ時は、すでに二、三分の間あり、斯くして一夕一回を終る時は、夜すでに十一時、若しくは十二時

に達す。而して筆記したる半切紙は毎回二尋ばかりを通過例とす。先生鰐口より五円札を取出して、帰途の車代にせよと与ふ。鶴谷頂きて矢野邸を出て、門前にて腕車を雇ひ日本橋まで到り、それより薬研堀には帰らずして吉原に行き、娼妓の部屋に机を備へしめ、矢野邸における筆記を文章に改めて、一章を完全ならしめ、浄書して、翌朝報知社に出勤し、先生の机上に供え置くを例とす」

翌年発行して、当時のベストセラーとなる「経国美談」は、こうして寸暇に稿を重ねていったが、秋になると、大隈のかねてからの念願であった学校の設立が待っていった。

